いま紛争下の世界で

イスラーム世界の女性たちと私たち

岡　真理

一　はじめに
——イスラーム世界とはいかなる世界か

（一）アラブ／中東／イスラーム社会

ご紹介ありがとうございました。随分と遠方からもお越しいただきまして、ありがとうございます。また、このような貴重な機会を与えてくださいました東洋哲学研究所の皆様に感謝申し上げます。

私の専門分野は現代アラブ文学です。いま、アフガニスタンが空爆されている中で、イスラーム世界の女性たちの生活について具体的な話を期待されてお越しになられた方々も多数おいでになると思います。私が専門にしていますのは、女性たちの生活が具体的にどうこうというのではなく、もう少し理論的な話です。イスラーム世界は私たちにとっては「他文化」、つまりよその世界です。そのよその世界の文化であるとか、あるいは、そこにおける女性であるとか、そういった問題を考えるということはどういうことなのか、あるいは、それを考えるときに一体どういう問題が起こるのか、というようなことを主に考えております。

ですから、具体的な話を期待して来られた方には物足りない面があるかもしれません。しかし、強調しておきたいのは、単に情報として「現地の女性はこうだ、ああだ」というようなことを知ったとしても、そのことを私たちがどのように考えればいいのか。また、他文化の現象を私たちが考えるということが歴史的、社会的、あるいは文化的にどういう問題を持っているのかということを全く考えずに、「イスラームの女性はこうだ」ということだけを知るとしたら、それ自体が非常に大きな問題になることもあります。私はそういう関心に従って研究しておりますので、きょうの話もそうした内容になると思います。

また、日本で暮らしておられる多くの方はイスラームに関してあまり詳しくご存じないと思います。申し上げておきたいのは、「イスラーム世界」を一つの前提として、「そこの女性はこうなんです」という話はなかなかできないということです。例えば、フランスの女性だとか、アメリカの女性というと、フランスがどういう国でアメリカがどういう国で、というような話の前提はなくてもいきなり本題に入れると思いますが、イスラームの場合はそうではありません。イスラーム世界ってどこなのか、「アラブ」とか「中東」と私たちはよくいうけれども、果たしてそれがどういう世界で、歴史的にどういうところかじゅうぶん、私たちはわかって使っているのか。あるいは、イスラームはどういう宗教なのか。そこをまず踏まえないと、話を前に進められないということがあります。

昨日から、イスラーム世界がラマダンに入りました。このことがテレビのニュースでも放映されていましたし、また今朝の朝刊ではいろいろな新聞が「きょうからラマダン入り」と報じていましたね。

昨日のニュース番組を観ていましたら、論説委員かキャスターの方が、エジプトで二回ラマダンを経験したことがある。ラマダンというととても楽しいお祭りみたいな状況が一ヵ月続く。日中は唾も飲んではいけないぐらい厳格だけれども、日没と同時にワッと人が街に繰り出してお祭りみたいな状況になる、と話されていました。私もラマダンを経験しました。よく「雨

女」とか「雨男」とかいいます。どこかへ出掛けるときにその人がいると必ず雨になるという人のことです。そういう意味では私は「ラマダン女」です。どういうことかというと、イスラームの暦は太陰暦です。月の満ち欠けによって暦が決まるので、太陽暦とずれています。これも最近よく報道されているのでご存じの方が多いと思いますが、一年で大体十一日から十二日ぐらいイスラームの暦の方が短いのです。

ですから、イスラーム暦の新年は、年を追うごとにどんどん早くなっていきます。私は八二年の七月にエジプトに留学しましたが、ラマダンの真っ最中でした。そのときは一年三ヵ月エジプトにいて、ラマダンを二回経験して帰って来ました。その六年後の八八年四月にモロッコに赴任しましたが、やはりラマダンの真っ最中。三年いて、つごう四回ラマダンを経験しました。ですから、ラマダンに遭遇する確率が非常に高いのです。何て気の毒な、と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、先ほど申し上げたようにラマダンというのは実はお祭りです。日中飲まず食わずで我慢した分、夜になると皆弾けて、深夜までお店も営業していて、道が歩行者天国みたいになって、中央分離帯のところにカフェの椅子が並んで屋台が出て、辻々に即席のステージが設けられて音楽の生演奏をしている。ラマダンは同時に文化高揚月間でもありますから、様々な文化的な催しもあります。

日本でも大晦日の日は特別ですね。普段だったら日が暮れたら帰らなければいけない子供たちまで夜中に初詣でに行く。そういう一種の「ハレ」と「ケ」とある「ハレ」の日です。いってみれば、ラマダンというのは三十日間、その「ハレ」の状態が続く。ラマダン、つまり断食月が明けると、今度は「断食月が明けた」というお祝いを国によっては三日から五日お祝いします。

三十日間あれだけお祭り騒ぎをしておいて、何を今さら騒ぐこともないだろうと思うぐらい本当に楽しい月です。ただ、そのキャスターの方がいっているのを聞いてちょっと違うなと思ったことの一つは「日没と同時に街に人が繰り出して」とその方がおっしゃったことです。日没と同時に皆、食事をするので、もう、街は閑散として突然死んだようになります。人っ子一人いません。皆、家の中で必死で食べているのです。それも国によって違って、エジプトだと食卓にご馳走がいっぱい並び、それを皆が食べます。私が三年いたモロッコでは、まず野菜スープを飲んで、一日動いてなかった胃を静かに働かせて、それから甘いジュース、あるいはドライフルーツなど高カロリーのもの、糖分をまず補給して、三々五々街に繰り出して行きます。そして、深夜おなかが空いた頃戻って来て、そのとき初めて食事をする。非常に健康を気遣った食生活になります。ですから、日没と同時にワッと食べてといってもかなり国によって違いがあります。

もう一つ「それは違う」と思ったのは、日中は唾も飲むことも許されないぐらい厳しい、一切の飲み食いも、タバコを飲むことも禁じられる、と語っていたことです。確かに禁じられてはいます。でも、けが人や病人、妊婦は断食を免れます。では、健康な人はそれだけ厳しいのか。実は、そんなことは全くなくて、おなかが空いたら食べていいのです。どうしても我慢できなかったら食べて、「神様ごめんなさい、きょうは食べちゃいました」、それでいいのです。そして、翌年の断食月がくるまでに、その年の断食月に食べてしまった日数分、断食すればそれでかまわないのです。すごく合理的だと思いませんか。

もう一つ合理的な例を説明しますと、イスラーム教徒が一日に五回礼拝することはよく知られています。礼拝の時間がくるとモスクに行って一糸乱れぬ姿で大勢の人たちが礼拝している様子が日本では紹介されます。私たちはそれを見て、彼らはとてもファナティックで全体主義的であるというような印象を抱きがちです。しかし、日本でもそういう敬虔な方はいらっしゃると思いますし、そうでない人も大勢いるでしょう。イスラームもそれと同じです。

外科医が執刀中に礼拝の時間が来たからといってお腹を開いたままで礼拝に行くかというと行きませんよね。あるいは、タクシーの運転手さんが礼拝の時間が来たからといって、お客さんを放って礼拝するという

こともありません。一日に五回の礼拝がありますが、お昼の時間のお祈りというのは、三時ぐらいの午後の祈りの時間が来るまでにすればいいわけです。午後のお祈りというのは、日没の祈りの時間が来るまでにすればいいのです。礼拝をするつもりのある多くの方は礼拝の時間が来たときにお祈りしますが、たまたまそのときに何かの事情があってできなかったら後で行います。つまり非常に時間的な幅があるということです。

では、次のお祈りのときまでにできなかったらどうするのか。次のお祈りのときに「まとめて」やればいいのです。「まとめて」ってどうやるのかと思うかもしれませんが、イスラームの礼拝の様子をご覧になったことがある方であればおわかりのとおり、イスラームのお祈りでは立ったり座ったりという屈伸運動をします。まさに屈伸で、ひざまずいて額を床につけて、また座って、また立ってと。

じっと座って手を合わせてお祈りするのが祈りの基本としてあるような文化の人間にとっては、あんなに身体を動かすのはお祈りとしては異質だと思われるかもしれませんが、イスラームの考え方だと、精神だけでなく肉体もとても大切なものです。例えば、キリスト教では肉体を卑しみますね。肉体的な欲望、つまり性欲であるとか、食欲であるとか、あるいは睡眠欲であるとか、そういった人間の欲望を徹底的に抑圧することによって精神を純化していく。それが神に近づく道だとされていますが、イスラームはそういう立場は取りません。

イスラームは厳格で禁欲主義的な宗教だというイメージが強いと思います。ところが、人間の欲望については、神が人間をそのようにつくられたという考えから、大らかに肯定しています。カトリックではいまもセックスは生殖目的にのみ許されることになっています。だから、避妊は許されない。しかし、イスラームの場合はそういうことはなく、合法的な婚姻関係にある男女の間であれば、性的な快楽は男女の権利として、男性だけでなく女性にも追求する権利が認められています。

女性のセクシュアリティー、性にまつわる事柄についてイスラームは、例えば、肌を露出してはいけないとか――これは実は女性だけではなく男性もそうなのですが――そういった面が公共領域において厳格に求められているので、とても厳しい宗教だというイメージがあると思います。でも実は違うのです。先ほども申し上げましたように、イスラームは人間の欲望を肯定しています。ですから、「聖職者」とよく訳されますが、イスラームには世俗を離れた聖職者は存在しません。イランのホメイニさんにしても妻帯者でした。妻帯することもイスラームでは何ら禁忌ではないのです。

もうちょっとラマダンの話をしますと、エジプトに留学していたときに地中海世界を旅行しました。トルコからシリアに入ったときラマダン月が始まりました。翌日レストランが閉まっていたら食事はできないと思い、ホテルの人に「昨日からラマダンになったけれども、レストランはやっているだろうか」と聞いたところ、「気にするな」というのです。気にするなといわれても食べられなかったら困る。しかし「気にするな」と。後で「気にするな」の理由がわかりました。お店は普段どおりやっていました。シリアもイスラーム圏でイスラーム教徒が大勢います。でも、社会主義圏ということもあって、昼間でもレストランは閉まらない。もちろん、断食しておられる方もいらっしゃるでしょう。しかし、イスラーム教徒でも平気で食べている。全然、気にしなくていいのです。ですから、シリアでは全然困りませんでした。次に、シリアの首都のダマスカスからバスで五時間ぐらいのヨルダンのアンマンに入りました。ヨルダンは王国です。喉が渇いたのでジューススタンドでジュースを買おうとしたら、スタンドの売り子の青年が「いまはラマダンだから売れない」というのです。「私はムスリムじゃないから売ってくれ」といったら、売ったら自分が処罰される、という。だったら、なぜ昼間店を開けているのか、と思いました。バスでダマスカスから五時間ほどしか離れていないヨルダンではまずレストランはやっていない。食事をすると、それが法的な処罰の対象になるのです。

ここで何を申し上げたいかというと、一口にイスラーム世界、あるいは同じアラブ世界といっても、しか

も隣り合っている国にもかかわらずラマダン中に、断食する人としない人がいます。その社会が断食に対してどういう態度を取るかということも、その社会によって違うということです。ですから、「イスラームでは」というような表現は、イスラーム世界に馴染めば馴染むほどいえなくなってきます。「イスラームといっても、いろいろな人がいるし……」と。本当に、そうとしか答えられない現実があります。

さて、いままでイスラーム世界という言葉を何の定義もなしに使ってきました。また、私たちはアラブとか中東とかイスラーム世界という言葉をよく使います。では、アラブとはどこなのでしょうか。中東ってどこでしょう。皆さん、「中東」という言葉をよく聞くし、ご自身も使うと思いますが、「中東ってどこですか」といわれて説明できますでしょうか。何かあの辺、という感じではないでしょうか。何となく中国は中東ではない。でも、中国から向こうの西の世界、「あの辺」という形で、中東をイメージしておられるのではないかと思います。

中東とは、具体的にいえばまず、いまメディアで盛んに取り上げられているアフガニスタンから西の世界です。アフガニスタンからアラビア半島、それにエジプト、スーダンが入ります。北アフリカは言語的にはアラビア語であり、宗教的にもイスラームが大半を占めているので、いまではここも「中東」と考えられています。また、歴史的にはアンダルシア地方、いまのスペインは、私たちはヨーロッパだと思っていますが、歴史的には八世紀から十五世紀まで八百年間にわたってアラブ・イスラーム世界でした。グラナダ、セビリア、コルドバといったアンダルシアの諸都市でアラブ・イスラーム文化のまさに黄金時代が花開いたのです。そうしますと、スペインは歴史的にはアラブ・イスラーム世界であり、中東だといえます。また、中央アジアのイスラーム系の各共和国、キルギスタンとかカザフスタンとかウズベキスタンとかタジキスタンといった国々も、ソ連が崩壊して共和国として独立した以降は、中東の中に含めて考えられています。北アフリカのリビア以西もいまは中東です。

歴史的には、これらの国はペルシャ語やトルコ語、アラビア語を使い、宗教はイスラームです。したがって、中東というのは厳密な地理的概念ではなく文化的な領域概念だとお考えください。言語的に見ると、アフガニスタン、イランはペルシャ語の文化圏です。トルコはトルコ語です。そして、この三ヵ国を除いた残りの国々がアラビア語を公用語、ないしは第一言語としているアラブ世界ということになります。

（二）アラブ人とはいかなる者たちか

ですから、中東の大部分はアラブ世界です。よくイランとイラク、お隣同士で同じイスラームですからあまり区別されませんがイランはペルシャ語で、イラクはアラビア語ですからアラブになり、民族的に異なります。ちなみに、ペルシャ語はインド・ヨーロッパ系の言語です。英語やフランス語等の遠い親戚に当たります。文字はアラビア文字から発生したペルシャ文字を使いますので、何となくアラビア語と似たような言語とお思いかもしれませんが、文法的には実は英語やフランス語と同じ家族に属する言語です。

私は中東の中でもアラブ世界のことを専門にしております。ではアラブ人とはどういう者たちかというと、アラビア語を自分の言語とし、アラビア語で歴史的に培われてきた文化を自分の文化だと考える者たちです。アラブ人のアイデンティティーはアラビア語という言語やその言語文化によって規定されているのです。つまり、宗教とは全然関係ありません。私たちはユダヤ人とかクリスチャンというと、ヨーロッパの人たちと考えがちです。しかし、この中東アラブ世界にも大勢のユダヤ教徒やキリスト教徒がいます。

これはちょっと考えれば当たり前のことです。そもそもユダヤ教にしてもキリスト教にしてもこのアラブ世界の中心であるパレスチナで生まれた宗教なのですから。ローマ帝国がキリスト教を国教として認めるまでにも三百年かかっています。ヨーロッパにキリスト教が浸透する、あるいは、ヨーロッパのさらに北の方がキリスト教化されるには千年かかっている。それ以前にまずこの中東にキリスト教にせよ、ユダヤ教にせ

よ広まっているのです。

ですから、「ユダヤ人対アラブ人」の「宿命の民族対立」みたいなことがいわれますが、これはイスラーム世界内部で考える限り全くナンセンスです。なぜなら、アラブ人は先ほど申し上げたようにアラビア語を自分の言語としている者たちのことで、宗教とは何の関係もないからです。

アラブ世界の中には大勢のユダヤ教徒もいます。キリスト教徒もいます。ブッシュ大統領が九・一一の事件の後に「これは戦争だ」、「十字軍だ」みたいなことをいいました。十字軍はヨーロッパ・キリスト教徒から見ると、「ヨーロッパ・キリスト教世界」対「アラブ・イスラーム世界」、要するに、「キリスト教」対「イスラーム」の宗教戦争という位置づけがなされていると思います。そして、私たちもこれまで、そのようなヨーロッパ・キリスト教社会の歴史認識を経由して世界史を理解してきました。しかし、アラブ・イスラーム世界にはムスリム（イスラーム教徒）もいるし、キリスト教徒もいるし、そしてユダヤ教徒もいます。彼らは皆、アラブ人です。となると、「キリスト教」対「イスラーム」という対立の構図は果たして成立するでしょうか。エルサレム、アラブ世界にいたアラブ人はイスラーム教徒だけでなく、キリスト教徒もユダヤ教徒も含めて、ヨーロッパ人の侵略に遭ったのですから。

『アラブから見た十字軍』という本も出ています。私たちはこれまで、ヨーロッパ・キリスト教世界の歴史認識を通じてしか、例えば、十字軍という出来事を考えてきませんでしたが、それをイスラームの側から見たらどうなるのか。十字軍に攻められたのは、ムスリムだけではないのです。キリスト教徒もユダヤ教徒も、アラブ人として侵略を受けた。これが宗教戦争と言えるでしょうか。イスラーム側から見ると、明らかにヨーロッパ人がアラブ世界を侵略してきた、そういう戦争でした。

（三）イスラームとはいかなる宗教か

では、イスラームとはどういう宗教でしょうか。私たちはヨーロッパ・キリスト教社会におけるイスラーム観を、知らず知らずのうちに共有してしまっているので、その影響を受けています。イスラームはキリスト教とは全く異質であり、アラブの宗教、アッラーという何かちょっと訳のわからない神様を信仰している宗教と思いがちです。そこから、「文明の衝突」、「宗教の衝突」といったことがいわれます。しかし、実はイスラームという宗教はユダヤ・キリスト教と同じ一つの系譜上、その延長線上に位置する宗教です。キリスト教がユダヤ教の延長線上にある宗教だという認識は、多くの方がお持ちだと思いますが、それと同様に、イスラームは、これら二つの宗教と同じ系譜上にある宗教なのです。

ユダヤ教の聖典がキリスト教においても旧約聖書という形で聖なる書物とされています。実は、イスラームも同じです。同じというのは、ユダヤ教が成立して唯一神、あるいは創世主について説きます。この世界のすべてを創造した神は唯一のものなのだ、と。そのユダヤ教は今日までユダヤ教として存続しています。そして二千年前にイエスが現れて、そのイエスを救世主として信仰する者たちがキリスト教徒となりました。

イエスの教えによって、民族宗教であったユダヤ教がキリスト教として世界宗教、普遍宗教とされました。しかし、イスラームの考え方では、確かにクリスチャンは人間に対する普遍的な教えを、ユダヤ民族だけに限定していたユダヤ教の教えを、全人類に開放したという点では正しかった、と評価します。しかし、そのときクリスチャンは、預言者ではあるけれども人間に過ぎないイエスを神と同一視するという過ちを犯してしまった、と見るのです。

こうして、七世紀にムハンマドが、神と同一視されたキリスト教ではなく、もう一回、神の教えを正しくした。それがイスラームです。そして、ムハンマドは最後の預言者であるとします。イスラームでは神様のことを「アッラー」といいます。実はこの「アッラー」はイスラームの神様のことではありません。アラビア語で唯一の神、この世界を創造した唯一の神を「アッラー」といいます。

先ほど、アラブ人の中にはキリスト教徒もいると申

し上げました。日本で日本のクリスチャンは日本語の聖書を読んでいます。そこに、「神」と書いてあります。アメリカ人のクリスチャンは英語で聖書を読んでいます。そこには、神様のことはGod（ゴッド）と書いてあります。フランス人のクリスチャンはフランス語で聖書を読み、そこにはDieu（デュー）と書かれています。

では、神様がいっぱいいるのでしょうか。デューという神様や、ゴッドという神様がいるのでしょうか。そんなことはありません。デューもゴッドも同じです。アラブ世界でアラビア語の聖書を読むと、アッラーと書いてあります。神様は同じです。ですから、イスラームの神のことをアッラーというのは大きな間違いです。イスラームの神様とユダヤ・キリスト教の神様とは別のように思われてしまいますが、そうではありません。この唯一神のことをアラビア語でアッラーというのです。イスラームの側からすれば、同じ神様を信仰している者たちです。そういう意味で、宗教は違ったとしても同じ神様を信仰しており、またその同じ神アッラーから、ユダヤ教徒の場合であればトーラー、キリスト教徒の場合であれば福音書として、人間に対する神の啓示を書物の形で同じように賜っている、と考えます。ムスリムの場合はコーランです。

（四）イスラーム世界とは

啓示を書物の形でとどめたのが、すなわち啓典です。イスラームの側からすると、ユダヤ教徒もキリスト教徒も同じ「啓典の民」とされています。イスラーム世界に対する認識に関しては、イスラームについてご存じなくて、歴史的にヨーロッパのキリスト教世界で培われたフィルターを通じて見ている方と、イスラームを内側から経験した者、ムスリムや、私のような文化的にはアウトサイダーでも現地で生活したことがある者とでは、大きな違いがあります。例えば、「ヨーロッパ・キリスト教世界」といったとき、それはキリスト教の世界です。キリスト教徒だけ、そしてキリスト教の文化、教会がある。そこでは、歴史的に異教徒であるユダヤ教徒は常にキリスト教徒の他者として排除されてきました。反ユダヤ主義がヨーロッパ・キリスト教社会の中にはずっとあったのです。

そして近代になると、「人種」というような非常におぞましい概念が科学的な偽装のもとに生み出されました。「人種」などというのは科学的には全く根拠のないものです。歴史的な反ユダヤ主義と、近代の人種主義が最悪の形で結合したのがナチスドイツでした。ヨーロッパにおいて一説によると五百万人とも六百万人ともいわれる、ユダヤ人とされた者たちが、アウシュヴィッツを初めとする絶滅収容所に送られて、民族のせん滅が図られたのです。

ところが、イスラーム世界といったときに、同じようにヨーロッパ・キリスト教世界との類推から、それはイスラーム教徒だけのイスラーム教という宗教だけの文化的世界を考えると、間違ってしまいます。なぜなら、イスラームの世界はイスラーム教徒だけでなく、キリスト教徒やユダヤ教徒もまた、その社会の構成メンバーとして共存共生することを原則とする社会だからです。

イスラーム文化の中には、イスラーム世界におけるキリスト教の文化も入ります。ユダヤ教の文化もあります。イスラーム社会に行ってみてください。キリスト教の教会があります。ユダヤ教のシナゴーグもあります。異なる宗教、異なる民族が共存共生する、それが社会のシステムとして存在していた。社会の原則として存在していた。それがイスラーム世界の歴史的な特徴です。

私たちは、イスラームというと何か寛容さに欠ける非常に厳しい宗教というイメージを持ちがちですが、キリスト教に再征服されたスペインでは、異端審問の嵐が吹き荒れました。改宗キリスト教徒が本当にキリスト教徒なのかを異端審問し拷問にかけ殺してしまう。他宗教に対して共存を許さない歴史はイスラーム社会のものというより、歴史的な反ユダヤ主義を見てもわかるとおり、むしろヨーロッパ・キリスト教社会のものです。彼らは自分たちの社会にある非常に否定的な側面をイスラームの側に投影して理解しているのです。イスラーム文明なるものがあるとしたら、その文明を特徴づけているものは、多様な価値観に開かれている

多種多様な者たちの共存共生といった本来的なシステムを持っているということです。

ただ、それはあくまでもシステムです。あるいは「原則として持っている」といういい方をいたしました。イスラーム世界において、マイノリティーであったユダヤ教徒あるいはキリスト教徒が全く迫害されなかったのかというと、そんなことはないでしょう。実際には様々な葛藤や軋轢、対立、迫害もあったと思います。

イスラーム教徒同士の間でも、それは当然あるわけです。大切なのは、社会が原則として何を持っていたかということになります。つまり、歴史的事実としては迫害や対立があったとしても、それはイスラームの観点から見れば原則の逸脱であり、イスラーム法の教えに反することになります。

ですから、歴史的にヨーロッパ・キリスト教社会で、ユダヤ教徒との共存が社会の原則としてあったかどうかということです。一つ例を挙げます。モロッコは歴史的に地中海世界で最大のユダヤ教徒の人口を抱えている社会でした。モロッコは「カサブランカ」という映画でもご存じのとおり、フランスの植民地であったため、本国フランスがナチスドイツに占領された結果、自動的にナチスの支配下に置かれてしまうことになりました。

そうすると、モロッコの当時のスルタンに対しても、モロッコ国内のユダヤ教徒を検挙せよという命令がナチスの傀儡政権であるフランスのビシー政権を通じて下りました。そのときスルタン、後のムハマド五世がどう応えたか。「ユダヤ教徒といえども私の臣民である。そして、スルタンである私には臣民であるユダヤ教徒を守る義務がある」といって、決然とその要求を拒絶しています。ナチスに占領されていた数年間に、フランスにおいてどれだけの数のユダヤ人が検挙され、密告され、逮捕され、収容所送りになって帰らぬ人となったことか。それを考えますと、このことは、イスラーム世界に対して新しい光を投げ掛けてくれるのでないかと思います。

ちょっと話が前後して申し訳ありませんが、この「イスラーム」という言葉は唯一神、アラビア語で「アッラー」ですが、「アッラーに対する絶対的な帰依」ということを意味します。先ほどもいいましたように、ユダヤ、キリスト教とイスラームというのは同一の系譜上に位置していますから、旧約聖書や新約聖書に出てくる教えをイスラームでも自分たちの教えの一部としています。

例えば、アダムとイヴのアダムから、ノアの箱舟のノアや、あるいはモーゼや、それからアブラハムといった者たち、イエスも含め、イスラームにおいては皆、ムハンマドと同じ預言者として扱われています。そして、アラビア語ではイブラヒームといいますが、アブラハム、神の命令で自分の息子を生贄に捧げようとした、つまり、神の命令であれば大切な一人息子であっても神に捧げる、生贄に捧げようとする、このアブラハムの行為にイスラーム教徒はまさにイスラーム、神に対する絶対的帰依の姿を見ます。

このアブラハムはイスラームにおいては「最初のムスリム」と呼ばれています。イスラームという宗教が成立するのは七世紀のことですが、まさに私たちにとってはユダヤ教の世界、旧約聖書の世界のアブラハムがイブラヒームとして最初のムスリムになります。だから、アラブ世界、イスラーム世界にはイブラヒームという名前の人が大勢います。またヨセフにあたるユーセフもいます。あるいは、ダビデのダウードとか、ヤコブとか、あるいはモーゼのムーサ、イエスのイーサといった、旧約や新約でお馴染みの名前のアラブ人がイスラーム教徒には大勢います。

（五）エルサレムは誰のものか

イスラーム世界ではキリスト教徒、ユダヤ教徒も共存共生することを原則としていましたが、いまパレスチナ問題、あるいはエルサレム問題という形で、パレスチナは誰のものか、ユダヤ人のものか、アラブ人のものか、さらにエルサレムは一体、ユダヤ人のものなのか、イスラーム教徒のものなのか、という帰属をめぐる対立が生まれています。

そのため往々にして、ユダヤ、アラブ、二千年の闘いとか、三千年の闘いとか、ユダヤとイスラームが、

まるで旧約聖書に遡るような宗教対立、民族対立であるかのように語られがちです。しかし、これこそまさに大嘘です。先ほど申し上げたように数千年の対立であろうはずがない。なぜなら、近代になるまでエルサレムもパレスチナも、それはイスラーム世界であったからです。そしてイスラーム世界であったということは、イスラーム教徒に専有的に支配されていたということではありません。

イスラーム世界であったというのは、ユダヤ教徒もキリスト教徒もイスラーム教徒も、そこを自分たちの街として、故郷として、共生していた。それが、イスラーム世界であったということの内実です。ちょっと独特の言葉ですが、私はそういう状況を表すのに「分有」という言葉を使っています。例えば、エルサレムの街はキリスト教、ユダヤ教、イスラーム教の聖地として、これら三つの宗教を信仰する者たちによってずっと歴史的に分有、つまり分かち持たれていたのです。

ところが、一つの土地とか、一つの国というように、一つの民族が排他的に独占的に所有する近代の国民国家という概念がこの地に移植される。これは、まさにヨーロッパから、西洋からもたらされたものですが、その結果、エルサレムでは、パレスチナ・アラブ人というのは歴史的にはムスリムもいれば、キリスト教徒もいるし、ユダヤ教徒もいたのですが、この中からユダヤ教徒がアラブ人とは異なる「ユダヤ人」として括り出されて、ムスリムとキリスト教徒がパレスチナ・アラブ人とされます。そして、そのパレスチナにユダヤ人の国であるイスラエルがつくられました。

いまエルサレムをめぐってユダヤ人のものか、イスラームのものか、あるいは、キリスト教徒のものなのか、三つ巴の闘いになっている。しかし、アラブの研究をしている私の立場からすると、対立しているように見えて、それは対立ではありません。彼らは実は同じ主張をしているのです。同じ主張とはどういうことかといえば、一つの都市は排他的に一つの宗教とか、一つの民族の所有物であるという、その価値観は同じだからです。三者が同じそういう価値観でユダヤ教のものだ、キリスト教のものだ、イスラームのものだといっている。決定的に対立しているように見えて、実は同じ価値観に基づいているのです。「文明の衝突」どころではありません。

さて、私たちはそのような考え方こそ拒否していくべきではないでしょうか。そして、イスラーム世界の伝統的、歴史的な考え方、すなわち、エルサレムがイスラーム教徒のものでもあり、ユダヤ教徒のものでもあり、そして、キリスト教徒のものでもある、ととらえていくこと。一つの都市が宗教や民族の違いを超えて多様な者たちに開かれ、共有される。それこそが人間の社会の、あるいは文明のシステムであるとするような、そういう価値観に私たちもまた立たなくてはいけないのではないでしょうか。

イスラーム世界を勉強するということは、「エルサレムはイスラーム教徒のもの」という価値観に立つことではなく、エルサレムはイスラームのものか、ユダヤのものかという二者択一の同じ価値観に両方が立って争っていること、その争いを拒否して、そうではない別の文明の在り方を学ぶということだと思います。この対立は実は近代につくられたものです。私たちは、パレスチナ人のものなのか、ユダヤ人のものなのか、というような問い、その問い自体を拒否しなければいけない。イスラームの側に立つ、パレスチナの側に立つというのはエルサレムはイスラームのものだと主張することではなく、近代以前の共存共生、それこそが社会の原則となるような、そういうエルサレム、そういうパレスチナとしてこれらの世界を理解していくことではないか、と私は考えています。

二　イスラームと女性

（一）イスラームは女性抑圧的宗教か

イスラームというと往々にして非常に女性抑圧的な宗教であるというイメージが強いのではないかと思います。例えば、原理主義といわれているアフガニスタンのタリバンが女性たちにブルカを被せてというようなことが、女性の人権抑圧として語られます。それに対してイスラームの側は、いや、イスラームこそが女性を非常に差別的な状況から解放したのだと主張しま

す。一体、どっちが正しいのでしょうか。

岩波の『世界』という雑誌の最新号に、川崎けい子さんが「アフガン女性の闇に光を当てる団体ＲＡＷＡ」という文章を寄せておられます。きょうの朝日新聞の朝刊「私の視点欄」にも、川崎さんはこのＲＡＷＡについての文章を書いて紹介しておられます。タリバン以前からアフガニスタンの女性たちは様々な形の人権侵害に遭っており、ＲＡＷＡが、タリバンに限らずあらゆる形態の原理主義を拒否する活動をしていて、それに対する支援をこの川崎さんはしておられます。

その文章の中で、川崎さんは次のように書いておられます。ちょっと引用しますと、「ＲＡＷＡの学校では基礎教育を提供するだけではなく、アフガニスタンがいまどういう状況に置かれているのか、何が現在の苦況をもたらしたのかということを生徒に認識させ、女性も男性と同じように生きる権利があるという近代的な考え方を教えている」。最後の部分を繰り返します。「女性も男性と同じように生きる権利があるという近代的な考え方を教えている」。

私は川崎さんが書いておられることには基本的には賛成ですが、ここで、ちょっと細かく考えてみますと、「女性も男性と同じように生きる権利がない」とする価値観は前近代的であるといっていることになります。そして、タリバンも北部同盟の人たちも含め、原理主義といわれている者たちは皆、女性には男性と同じように生きる権利がないとする価値観に立っている。それを、彼女たちは否定している。そこからイスラームの原理主義はイコール前近代的である、となります。

では、原理主義とは何でしょうか。聖典を字義通りに解釈する、聖典は無謬であるとする。聖典にはすべて真実が書かれていて、それを忠実に実践する。そうした態度に対して「原理主義」というレッテルが貼られます。そうすると、いまの三段論法でいくと、イスラームのコーランの教えを字義通りに解釈してそれを実践すると、女性は男性と同じように生きる権利がないことになり、イスラームは前近代的な宗教だ、ということになってしまいます。

イスラームが成立する以前のアラビア半島では、赤

ちゃんが生まれても女の子だとすぐ殺してしまう慣習がありました。まさに女性は男性と同じように生きる権利がないということの実践です。もちろん、女の子が殺される背景には様々な経済的、社会的要因がありました。

コーランでは明白にこの女児の嬰児殺しを禁じています。いいかえるなら、コーランは、女性も男性と同じように生きる権利があると主張している、ということです。それをして近代的な考え方であるとするならば、イスラームは七世紀においてすでに近代なのです。男女平等の思想が、もしそれを近代というならば、ヨーロッパ世界にはるかに先だって、まさに七世紀に現れていることになります。

そこを根拠に、イスラームの人たちは、イスラームの登場によって当時、女性たちが被っていた様々な抑圧的なものから解放されたのだと主張します。イスラーム以前の時代を「ジャーヒリーヤ時代」といいます。「ジャーヒリーヤ」とは「無知」という意味で、明かりが無いと書いて「無明時代」と訳されます。つまり、イスラームの観点から見れば、イスラームの啓蒙の光が未だ差していない無知蒙昧な暗黒の時代であったという意味です。

その時代は、確かに女の子の嬰児殺しというような非常に女性差別的な習慣もありました。けれども、同時に女性たちは様々な形で自由を享受してもいました。例えば、婚姻関係にしてもイスラームの成立以降、イスラームは男性に一夫多妻を許し、女性には複数の男性と関係を持つことを禁じています。これは女性に関していえば、女性のセクシュアリティー、女性の性関係が一人の男性に限定されるということです。しかし、ジャーヒリーヤ、つまり、イスラーム以前の女性たちは、地域にもよりますが、もっと自由にいろいろな男性と、女性自身のイニシアチブで性関係を持っていました。それが、イスラームの登場によって、イスラームが合法とする女性の性関係は一人の男性しか認められなくなるというように制約されていきます。ですから、単純にオール・オア・ナッシングで、イスラームは女性を抑圧したのか、解放したのかということでは

なく、個々の事象を見ていったときに解放した面もあれば、また非常に制約的になっていった面もあり、様々な側面があるのだと思います。

（二）コーランにおける両性平等的な性格

女の子の嬰児殺しの例を見ても、イスラームの教えの中には非常に男女平等主義的な声が存在しています。例えば、七世紀のアラビア半島で、預言者ムハンマドが生きていた頃ですが、イスラームに改宗した女たちがある日ムハンマドのところに行って、異議申し立てをしました。「私たちはイスラームに改宗して男性のイスラーム教徒と同じように神の教えを守っているのに、なぜ神は啓示を下すとき男性のムスリムにしか呼び掛けないのか」と。アラビア語は、フランス語と同じように男女の性があります。男性のイスラーム教徒であれば「ムスリム」、女性のイスラーム教徒であれば「ムスリマ」といいます。フランス語もそうですが、複数形になったとき、女性の複数形は女性しか指さないのに対して、男性の複数形は女性も含みます。英語でMan（マン）といったとき、それは「男」であると同時に場合によっては「人間」全般、女も含むのと同じように、男性をもって人間が代表される。ですから、「男性ムスリムたちよ」という呼び掛けは、形の上では男性に呼び掛けているけれども、女性も含んでいるといえなくもない。ところが現実は、男女を含めて呼び掛けているのだといいつつ、形の上では実は男性にしか呼び掛けていないのです。ムスリムの女性たちは、それは女性差別ではないかと訴えたのです。

すると、次に啓示が下ったときには「慎み深い男性ムスリムたちよ、そして慎み深い女性ムスリムたちよ」と女性のムスリムにも対等に神は呼び掛けた。「慎み深い」という形容詞を挙げましたが、そのほかにも幾つかムスリムに要求される徳目が列挙されています。それが男性と女性とで全く同じです。例えば、男性だと「勇敢」で、女性だと「慎み深い」とか、そういう違いがあるのではなくて全く同等の徳目が「男性ムスリムたちよ」、そして同じように「女性ムスリムたちよ」と呼び掛けられているのです。

ライラ・アハメドという人が『イスラームにおける女性とジェンダー』という本を書いています。彼女は、エジプト出身の歴史学者ですが、その中で、聖典とされるものに、女性の信徒が男性の信徒と並んで対等に呼び掛けられ、その教えの対象として明示的に言及されているのは極めて稀である、と述べています。ライラ・アハメドの本によれば、彼女はユダヤ教とキリスト教の聖典についてはフォローしていると思いますが、仏教に関してはどれだけフォローしているかわからないので、すべてと比較してとはいえないまでも、少なくとも、ユダヤ・キリスト教の伝統からいえば、イスラームは非常に両性平等的で、男性と女性にイスラーム教徒の徳目として要求されているものが全く同じです。そして、それに対して、同じものが報奨として約束されてもいます。そのことを見ても非常に男女平等的です。

ですから、イスラームの教えの底辺には、この両性平等主義的な声が通奏低音として流れています。アラビア語で預言者の慣行のことをスンナといいます（そこから「スンナ派」が出てきています）。敬虔なイスラーム教徒は、この預言者が生きていたときに取っていた行動を範とします。ウサマ・ビンラディンのターバンをした格好は、まさに預言者をモデルにした服装です。

預言者は、女性に関する様々な逸話を読む限りでは、ほとんどフェミニストです。例えば、奥さんたちが自分のいうことを聞かないといって非常に悩んでいる。そうすると、後に第二代カリフになったウマルが「そんなのさっさと殴ればいいのに」みたいなことをいっても、預言者は妻に手を上げるようなことはできなかった。その預言者の奥さんが街に出てセクハラに遭ったりすると、ウマルが来て「顔も隠さずに歩いているから一般の信徒と区別されず、そういう嫌がらせに遭ってしまう。せめて預言者の奥さんらしくベールぐらい被せたらどうか」といった進言をする。それに応え「預言者の妻たちよ、お前たちは特別な存在なのだから胸に覆いを垂れなさい」というような啓示が下るのです。イスラーム教徒はメッカの方向を向いてお祈りします。そのメッカの方向でまさに奥さんが昼寝をして

いる。それでも、預言者はそのまま礼拝をしていたというスンナも残されています。

（三）イスラーム法における非対称的な男女の権利

イスラームにおいて非常に女性が差別的に扱われているといわれていますが、コーランに女性差別があったのか、預言者がそうであったのかというとそうではない。むしろ、後世の時代に非常に男性に都合よくコーランが解釈されてイスラーム法なるものがつくられていった結果ではないか、とライラ・アハメドは語っています。確かにイスラーム法を見ると、女性の権利が非常に制約されています。例えば、男性は四人奥さんを持てて、しかも、離婚は自由気ままにできる。しかし、コーランには複数の奥さんがいる場合には平等に愛さなくてはいけないということが書かれています。また、四人まで奥さんを持っていいという啓示が下った背景には、戦争が多くて戦争未亡人、またお父さんを亡くした子供を抱えた母子家庭の急増という事情がありました。社会保障の一つとして「神は未亡人と結婚することを喜ばれ給う」という啓示が下っています。金持ちの男性が自分の欲望にまかせて若い奥さんを次々に貰うということでは決してないのです。しかし、そうした背景があることは全く省みられずに、「四人まで」という部分だけを取り上げ、男性に都合のいいように解釈されている。これは、一体いつの時代にどのような者たちが、どのような価値観で、聖典を解釈していったのかという問題になります。

（四）「原理主義的」であるとはどういうことか

もう一つ例を挙げてみます。タリバンは、アフガンの女性たちにブルカを被せており、イスラームの教えを厳格に実践しているから原理主義であるといわれます。一方、エジプトにはムスリム同胞団という、やはり原理主義のレッテルを貼られる団体があります。一九五〇年代に、このムスリム同胞団の二代目の指導者であったフダイビーという人が、「女性が高等教育を受けて専門職に就くのは何らイスラームの教えに反しない」という見解を述べています。

タリバンもムスリム同胞団も、どちらも原理主義と呼ばれる団体です。でも、タリバンは女性にブルカを被せて公職から追放しました。女性の居場所は家だといって。片や、五〇年代のムスリム同胞団は、女性が高等教育を受けて専門職に就くのは何らイスラームの教えに反しない、と主張しました。もちろん、「家庭の義務を疎かにしない限り」という前提がつきます。でも、高等教育を受けることが認められている。タリバンは女性の教育も禁止しています。一体どちらが正しいのでしょうか。もし、タリバンの解釈がイスラームを原理主義的に解釈した教えだとするならば、なぜムスリム同胞団のような解釈が可能になるのでしょうか。

ムスリム同胞団が女性の高等教育を認めるにはそれなりの背景があります。同胞団を構成していた男性たちは中産階級出身です。中産階級の者たちにとっては、自分の一族の女性たち、妻や娘や姉妹が、高等教育を受けて専門職に就けば、そしてそれによって収入が増えることで、社会的なステータスも上昇します。女性が社会進出することと、ムスリム同胞団の支持母体の階級的な利害が一致しているのです。

それに対してタリバンは難民の人たちが中心となっています。しかも、都市の中産階級出身者ではなく農村部、地方出身の人たちです。そうすると、彼らは自分たちのローカルな社会に合った伝統とされる習慣を、「これがイスラームの習慣だ」といって都市部で行う。また、女性の社会進出によって職を奪われる男性が出てきます。特に階層的には貧困層の男性たちは、女性が労働力市場に出てくると女性とも競合することになってしまう。そうすると、彼らは女性の社会進出に当然、否定的な見解を取るようになります。「女性もどんどん社会に進出するべきだ」といっている男性たちと、「いや、女性の居場所は家だ」といっている男性たちがいたとしたら、彼らは一体どちらを応援するでしょうか。どちらもイスラームの名において、全く逆のことを肯定しています。したがって、イスラームの名のもとに主張されることであっても、たいていは、イスラーム本来においてはどうなのかということよりも、結局、その時々でどうのような利害をもった誰が、どう

いう社会的、政治経済的な状況の中で、解釈しているのかということが、決定的にかかわってきてしまいます。

ですから、「イスラームにおける女性はこうです」というようなことはいえない。タリバンのイスラーム解釈が、イスラームにおける女性なのでしょうか。ムスリム同胞団の主張が、イスラームにおける女性なのでしょうか。少なくとも、女性にとってはムスリム同胞団的な考え方がいいと思います。イスラームにおける女性の立場は、結局、それぞれの時代でそれぞれの社会の中で、政治、経済、社会、歴史、文化などの様々な要因によって決定されているということです。「コーランにはこう書いてあります」などといって、イスラームにおける女性の在り方、あり得べき姿を語ることなどできません。なぜなら、そのコーランですら非常に男性中心的に男性に都合のいいようにこれまで解釈されてきたからです。

イスラームにあり得べき女性の姿というのは、原理主義的ではないのです。それらはいままで男性中心的に解釈されてきました。それに抵抗して、むしろコーランを女性の視点から「原理主義的」に読み直そうという動きが世界的に高まっています。コーランに明らかに書き込まれている男女平等主義的な教え、それこそがコーランのイスラームの精神であるという形で汲み取っていこうとする、コーランを再解釈する動きが出てきています。高等教育を受けるということ自体女性ができないとするならば、あるいは宗教的権威によって女性が排除されている限り、コーラン再解釈の動きなどあり得なかった。それが、いまの時代出てくるようになっています。

（五）フェミニズムと植民地主義の歴史的共犯関係

アフガニスタンでタリバンが女性たちにブルカを被せていることが、九五年ぐらいのことだったと思いますが、『ニューズウイーク』にも取り挙げられ、アフガニスタンで重大な女性の人権侵害が行われているというニュースが広まりました。でも、すごくおかしいと思うのは、それではタリバン以前のアフガニスタン女性たちの人権は抑圧されていなかったのか、ということです。内戦後のアフガニスタンはもうめちゃめちゃな状態だった。いま、暗殺されたマスード将軍とかが英雄視されていますが、その北部同盟がカブールでどんなことをやっていたか。女性たちを掠奪し、誘拐拉致して強姦して殺していた。女性たちはブルカを被ろうが被るまいが、うかうか街も歩けない状況だった。

そういう状況にアフガニスタンの女性たちが置かれていたとき、世界は、あるいは私たちは、アフガニスタンの女性たちの人権を心配したでしょうか。アフガニスタンなどという国が世界にあるということすらも考えることなく生きていたわけです。ところが、タリバンが首都を制圧してブルカを被せているとなった途端に、突然、私たちはアフガニスタンという国があるということを思い出したのです。そこに女性たちがいて、アフガニスタンの女性たちにも人権があるということを思い出したのです。そして、ブルカを被せられるのは人権抑圧だという議論が西洋のメディア、欧米のメディアに溢れ出した。これは、どういうことでしょう。

つまり、イスラームの名によって何かが行われると、私たちはすぐそこで反応します。許せないと。でも、本当にアフガニスタンの女性たちの人権を私たちが真剣に考えているのだとしたら、イスラームの名によるものであろうがなかろうが、それ以前から彼女たちがどういう状況に置かれていたか、心配し、考えるべきではないでしょうか。

ナワル・エル・サーダウィーというエジプト出身のフェミニストがいます。もともとはお医者さんです。彼女の書いた本のうち十冊ほどは日本語にも翻訳されています。その中の一冊である『イヴの隠れた顔』の英語版への序文が日本語版にも載っていますので、ぜひ読んでみてください。サーダウィーが日本に来たときにある方との対談の中で、「西洋は私たちに人権を教える側ではない」と明言しています。

続けてサーダウィーはこういっています。「私たちの世界を植民地化して、いまネオコロニアリズムで経済搾取している。これは明らかに人権に反することであ

る」。つまり、明らかに人権に反することを歴史的にも、そして、今日もなお行っている西洋やアメリカが、イスラームは人権を抑圧していると、あたかも人権が西洋の占有物であるかのように、私たちに教えを垂れる資格はないという意味です。西洋の側のダブルスタンダード、二重規範を厳しく指摘しているのです。もし、お前たちが人権をいうのであれば、自分たちが私たちに対して行っている人権侵害を考えろという、そういう主張です。

これはブッシュ大統領が、「自由と民主主義に対する挑戦である」と、あたかも西洋文明なるものが自由と民主主義を本質とする文明であるかのように、そしてイスラームはそうではないかのように語って、アフガンの一般市民を殺戮している。この矛盾と重なるものです。にもかかわらず、私たちは、日本は西洋ではないけれども、でも西洋と同一化して、私たちは人権思想を持っていて、しかし、イスラームにはそれがなく、人権抑圧をしていると思い込んでしまう。そして、イスラームの名のもとに女性に対する人権抑圧が行われると、いろめき立って批判する。しかしサーダウィーは、それは反イスラーム主義であって、決して普遍的な人権に基づいたものではない、と主張しているのです。

一九七九年、革命によってイラン・イスラーム共和国が成立しました。イスラーム革命が起こったときも、イラン・イスラーム共和国において女性たちがチャドルを強制されて、革命前の王政時代に享受していた様々な権利が剥奪され、人権抑圧が起きている、と報道されました。これについてもサーダウィーは英語版の序文の中で言及しています。欧米のメディアはイスラーム革命以前、すなわち、王政下のイランで反政府の人たちが政治犯として秘密警察によって逮捕され、地下牢で拷問されて殺されているときに、一体何を批判しただろうか、と。人権侵害を重ねてきたこの王政イランを支えたのは、まさにアメリカだったのです。イスラームを人権侵害だといって攻撃するアメリカないしは西洋が、いかにダブルスタンダードであるか、わかると思います。

女性がベールを被らされていることを女性差別とし、そして、女性がこのように社会的に低い地位にいることが、歴史的にイスラームの文化ないし社会が遅れている証拠だとされました。帝国主義の時代、女性の社会的地位が文化全般の後進性の証拠とされ、西洋の国々がイスラーム世界を植民地化することが正当化されていたのです。歴史的には、女性解放が植民地支配を正当化する論理として使われていた。つまり、フェミニズムが植民地支配を正当化する論理として利用されたという歴史がイスラーム世界にはあります。

三　パレスチナの女性たち

ここで、パレスチナの女性たちの現状について考えたいと思います。イスラーム世界に生きている女性たちの現状を私たちが知るとすれば、それはイスラームにおいて女性がどう解釈されているか、あるいはコーランにおいて女性がどう解釈されているかということも大切かもしれません。しかし、同時にイスラーム世界の女性たちが今日被っている抑圧は、決してイスラームの名のもとにベールを被れとかいわれることだけでないこともまた事実です。アフガニスタンを見てもそれはわかります。タリバン政権下のカブールで、空爆下のカブールで、女性たちにとって問題は何か。ブルカを被らされることではなく、まさにアメリカのミサイルが降ってくることです。

しかも、イスラームの人権抑圧的なタリバン勢力をアフガニスタンから一掃するという名目で空爆が正当化されます。イスラーム世界の女性たちを見るときに、イスラームという宗教が女性たちをどのように抑圧しているかだけではなく、それよりももっと大切なことは、イスラーム世界とされているところで女性たちはどのような抑圧を被っているのかということです。彼女たちが被っている抑圧というのは決して彼女たちの文化とか宗教に由来するものだけではありません。

パレスチナの歴史を見てみると、ナチスによるホロコーストの犠牲者であるヨーロッパのユダヤ人のために、パレスチナの地にユダヤ人のための国をつくるということが一九四七年の国連会議で決定されます。で

も、ここからしておかしいのです。なぜなら、ヨーロッパのユダヤ人は、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義の歴史や近代の人種主義の結果としてのナチスの犠牲者であって、なぜ、その彼らのためにパレスチナ人の土地が提供されなければいけないのかという疑問があるからです。旧約聖書に古代においてユダヤ人がそこに住んでいたという記述があるからですが、これはある一つの宗教を信じる人たちにとっての神話的世界の語りです。その人たちにとってはそうかもしれないが、なぜ、それ以外の人たちが、それに基づいて犠牲にならなければいけないのか。そして、その結果、四八年にイスラエルが建国され、ある者たちは難民となって故郷のパレスチナを追い出され、また、ある者たちは自分たちの国に留まりながら、そこは突然ユダヤ人の国になってしまったために、キリスト教徒やイスラーム教徒のアラブ人は、自分の故郷にいながらにして二級市民以下になってしまいました。

四七年の国連のパレスチナ分割決議を見てみると、どう見てもユダヤ人の方により多くの土地が分割されています。そもそも国連が、人の土地を勝手に分割して、ここにユダヤ人の国をつくるなどと決める権利があるのかという問題があります。百歩譲っても、人口的にも全く少ないユダヤ人に対してより多くの領土が与えられているという不公正があります。イスラエルが建国され、当然、アラブ各国はそれに反対して戦争になり、イスラエルが勝利しました。そうすると、アラブ人国家とされている部分の多くをイスラエルは占領してしまった。これは四七年の国連決議を踏みにじっています。にもかかわらず国連、あるいは国々は直ちにこれをイスラエルの領土として承認しました。このとき残されていたヨルダン川西岸、東エルサレムは、六七年の第三次中東戦争を機に、イスラエルに占領されてしまいます。

九〇年にイラクがクウェートに侵攻しました。八月のことでした。そして、九一年の一月には国際法を踏みにじって侵略されたクウェートをイラクから解放するために、多国籍軍による湾岸戦争が始まりました。八月に侵略されてから一月までの五ヵ月間で、世界はクウェートを解放するために軍を投入しました。

しかし、六七年に占領されたヨルダン川西岸は、この九〇年に至るまで四半世紀近くもイスラエルの軍事占領下に放置されたままです。そして、イスラエルは次々にこの占領下で入植を行っています。それに対して、国連は毎回非難決議を出していますが、それは馬耳東風というか、何の効力も持たない。パレスチナは四半世紀放っておかれて、占領下の住民は軍の抑圧を日常的に受け、その間もイスラエルによる入植は次々に進み、東エルサレムも西岸もイスラエル領として既成事実化されていく。でも、クウェートはたった五ヵ月で解放された。湾岸戦争の後、そのダブルスタンダードが批判されて中東和平プロセスが始まり、九三年のオスロ合意により西岸とガザでパレスチナの暫定自治が始まりました。

しかし、二〇〇〇年の九月、いま首相になっているシャロン、当時はリクード党の党首でしたが、その彼がイスラームの聖地に強硬に入ることによって、オスロ合意が崩れて和平プロセス自体が崩壊しました。以来、パレスチナ側が投石したり、あるいは自爆テロをやったりすると、それに対してイスラエル軍がパレスチナ自治区にミサイルをぶち込む。自治区を封鎖して、戦車で街を包囲して砲撃する。九・一一の自爆テロを誰がやったのかまだわからないのに、それに対して先端的な兵器でアフガニスタンが空爆されているというような事態が、実は、二〇〇〇年の九月以来パレスチナではずっと起きているわけです。

こうした歴史の折々に、パレスチナの難民キャンプではパレスチナ難民たちが虐殺されています。一九五六年の第二次中東戦争の際、イスラエル国内のカフル・カーセムというパレスチナ・アラブ人の村での出来事です。外出禁止令が敷かれます。しかし、それは村人が野良に出てしまった後だったので、村人たちは外出禁止令が敷かれているのを知らずに日暮れに帰って来ました。すると、村の入り口に待機していたイスラエル兵が村人を次々に射殺しました。五十人ぐらいが射殺された。それに対して後に裁判が開かれ、イスラエル兵に命令した軍人たちには有罪判決が下されま

す。その処罰は何であったかというと、たしか日本円にして百円というような罰金であった。五十名もの命を奪っておきながら、本当に人をバカにしたような有罪判決です。

一九七六年、ベイルート郊外にあるタルザータル難民キャンプは、半年間にわたってレバノンの右派勢力に包囲されて集中砲火を浴びました。二万人規模のキャンプだったそうですが、半年後、医薬品も底をつき、食料もなくなって、解放勢力が降伏しました。そのとき、四千人が殺されていたといいます。

また、八二年にイスラエルがレバノンに侵攻しベイルートを包囲しました。封鎖され誰も入れなくなったベイルートのサブラーとシャティーラという二つの難民キャンプで、イスラエルにサポートされる形で、共犯関係にあるレバノンの右派民兵たちがやりたい放題の虐殺をしている。九月十六日から十八日にかけての三日間で二千人とも三千人ともいわれるパレスチナ人が虐殺されています。

これまでに何千人もパレスチナ人が虐殺されています。確かに、ニューヨークの出来事は一瞬にして数千人もの人間が亡くなるという非常にショッキングな出来事ですが、しかし、実はアフガニスタンもパレスチナもそうです。こういう事態は世界ではむしろ日常なのです。私たちが、非日常と感じる、例外的と感じるような出来事を、パレスチナ人はこの五十年間の歴史の中で、まさに日常として生きてきたのです。

ですから、九・一一の出来事は、安全を享受して生きていること自体が、実は、この世界の中では例外的なことであり、私たちは遅ればせながら、私たちもまたアフガニスタンやパレスチナの人々が日常として生きてきた現実の世界の一部であるということを知ったのです。

四　むすびに代えて

今回の事件があって以来、イスラームについて知らなければいけないという認識が高まっています。確かに私たちはイスラームについて無知です。でも、私たちがどれだけアメリカ社会やキリスト教やヨーロッパ

文明について知っているのでしょうか。これもわからないと思います。イスラームについて無知だというとき、あたかも私たちは西洋文明であるとか、キリスト教についてはよく知っているかのように振る舞っていますが、本当にそうでしょうか。

イスラームについて私たちが知らないというのは事実だと思います。では、なぜ知らなくてはいけないのか。例えば、パレスチナの状況を知らないと、私たちがテロで狙われるからでしょうか。恐らく、いまイスラームに対する関心の高まりの中には、まさに私たちの命が脅かされている。放っておくと、この人たちのことを知らないと、いつ自分たちが殺されるかわからないといった不安があるような気がします。

でも、そうである限り、恐らく、テロはなくならないと思います。つまり、私たちの命が脅かされようが、脅かされまいが、アフガニスタンやパレスチナでは、これまで述べてきたような不正義が、ずっと行われ続けているのです。私たちの命が危険にさらされようが、さらされまいが、そのような不正義はなくされなければならないことであるはずです。でも、世界は、アメリカは、あるいは日本にいる私たちは、自分たちの喉元に銃が突きつけられて、自分たちの命がこのままでは危険だということにならない限り、アフガニスタンという国があることを意識しなかった。パレスチナ人がどういう目に遭っていたのかを見ようとはしなかったわけです。そうである限り、彼らは、自分たちが世界の無関心の中に捨て置かれ、ずっと殺され続けていることを世界に訴えるため、銃を私たちの喉元に突きつけてきます。

確かに、九・一一の出来事がきっかけとなって、イスラームやパレスチナに対する社会的な関心が高まっているのは悪いことではないと思います。しかし、これまでのような姿勢でいる限り、社会の非常に不均衡な構造はなくなりません。私たちが、私たちの安全のためにイスラームやパレスチナを理解しようとするのではなく、もう一歩踏み込んで問題を共有したいと思います。まさにそこに不正義があるから。そして、私たちがその不正義の一端に様々な形で加担しているか

ら。だからこそ、そのことを考えなくてはいけない。つまり、私たちの命が脅かされているからではなく、彼らの問題は私たちの問題であるのだから、だから理解しなくてはいけないのではないかと思います。

（おか　まり／京都大学総合人間学部助教授）

（本稿は、二〇〇一年十一月十七日に行われた講演内容に加筆いただいたものです。）